

「誰かのお手本に」

山口県 瑞龍寺住職 野坂直道

私たちは、何かを始める時、何かを学ぼうとする時、誰かに教えてもらったり、実際の姿や行いを見て、それをお手本にしたりして覚えていきます。

ある晴れた日のことです。ようやく歩けるようになった1歳4か月の息子と、近くの公園まで出かけました。途中細い畦道の所で、年配のご夫婦に会いました。その道は、普通に歩いてもすれ違えるほどの幅があるのですが、ご夫婦はよちよち歩く息子を見て「どうぞお先に」と端に寄って下さいました。

私がお心遣いに感謝し、息子の手を繋ぎながら少し頭を下げ「ありがとうございます」と言いながら、ご夫婦の横を通り過ぎようとした瞬間、「あつ」と大きな声がありました。息子の声でした。息子の「あつ」は、どうやら、ありがとうございますの「あつ」だったようです。普段は食事のあいさつで「手を合わせようね」と言っても、息子が私の言うことを聞くことはほとんどありません。けれども、年配のご夫婦が道を譲ってくださいったとき、息子は私と同じように、ありがとうございますという意味の「あつ」という声を発し、頭を下げたのです。その時私は「子どもは、親を見て真似をし学んでいる」と気づきました。

曹洞宗大本山永平寺を開かれた道元禅師さまは、「普勧坐禅儀」の中で、「冀わくはそれ参学の高流、久しく模象に習って、真竜を怪しむこと勿れ」と教え示されています。「真竜」、すなわち真の竜の姿や形を、どのように真似ようとしても、それは本物の龍ではないかもしれません。しかし、何十回、何百回、何千回と、その真似を続け、積み重ねていくことで、その一回、一回が本物の竜になるという教えます。

ですから、坐禅をするときは、足をのせて手を組み、形を調べて、仏さまが悟りを開かれた姿と同じ姿で坐るのです。私たちは、仏さまをお手本に真似をしているのです。小さい子どもは、両親や大人の姿をお手本にして言葉や行動を真似て、日々成長していきます。そして、親である私も子どもたちの成長を見守りながら、日々たくさんの事を学んでいるのだと思います。日々良い事も、悪い事も、さまざまありますが、子どもにはできる限り良い行いを真似て欲しいと思います。これは親や子の関係だけでなく、全ての人がひとりの人間として、ひとつひとつの行いをよく考え、それが誰かの良きお手本となるよう心がけることが、大切なのではないでしょうか。